

前回検討会 意見対応

重要種に係わる情報については、原則非公開とさせていただきます

令和5年3月

国土交通省 中部地方整備局 豊橋河川事務所

前回検討会意見と対応

1) 自然再生事業の取組み紹介（ショートムービー）

No	ご意見（概要）	対応（事務局回答）	今回資料
1	• 特になし	—	—

2) 令和3年 モニタリング結果（ヨシ原）

No	ご意見（概要）	対応（事務局回答）	今回資料
2	- 再生区では地形侵食が確認されているが抑制対策をどう考えていくか。 - ワンド型施工は、自然再生事業としての考え方としては良いが、中州の定着に起因する河岸部の侵食は、本来は河道管理として考えていくべき課題である。 - 当該区間は、上流部に比べて川幅が広がり河床勾配が緩やかになり土砂が堆積しやすい区間であり、中州は河道管理の面からは撤去を考えていくべき。	- 次期施工では、河岸部に土堤を残したワンド型の施工を計画しており、これにより侵食に対する課題解決を図っていきたいと考えている。 - 当該区間は、河川整備計画においても掘削を計画している区間であり、河道管理の視点から対応を検討していく。	今回ヨシ原ワンド型施工結果を報告【資料-4 P1～3】
3	■■■■■は、ヨシが生育していない水が出入りするクリーク周辺等のドロドロした地盤に生育している。 - ヨシ原再生後、地形にアンジュレーションができ、異なる底質環境がモザイク状に形成されたことによる効果と考えられる。 - ヨシ原再生事業を通じて、将来的には多様な植物の生育基盤としてのマイクロハビタットを評価していけると良い。	引き続き植生調査に関して、■■■■■の生育状況や生育環境との関係に留意して調査を進めていく。	湿性植物の生育状況をモニタリング【資料-2 P18】

前回検討会意見と対応

2) 令和3年 モニタリング結果（干潟）

No	ご意見（概要）	対応（事務局回答）	今回資料
4	- ヨシ原再生後、地形の起伏が生じることで環境のバリエーションが増えて、種の多様性（種数の拡大）につながるため、再生事業のなかでそういった面を評価していくと良い。 - 生物の生息量を増やすためには、その場に栄養分が供給されることが重要であり、その上で、次期計画にあるワンド型施工では、ワンド部に栄養分がストックされやすくなることで生物量の拡大にも期待できる。	- 地面を踏み固めすぎたり、きれいに整正し過ぎたりすることがないように施工時にも配慮 - 施工後のモニタリングを通じて、再生効果を多面的に評価していく。	今回ヨシ原ワンド型施工結果を報告 【資料-4 P1～3】
5	- 次期施工予定区は、堤防側に着目して今後干潟造成を検討していると思うが、なぜこの場所でシルト・粘土が多く、有機物量が多い環境になる特性を踏まえ、慎重に施工を検討すべき。 - 堤防側は、出水や波浪の影響により侵食されやすく、シルト・粘土がたまりやすい環境条件にあると想定されるが、明確な要因は不明である。 - 一方で、その前面側では、左右岸ともに地盤高は低いが、砂がたまりやすくなっていると考えられる。 - 干潟再生のデザインとして、多様性の観点からは、シルト粘土の多い場は現状のままとし、自然下で砂がたまりやすい場所近傍に砂を投入することで、干潟を造成する考え方があっても良い。	今後の干潟施工の参考とする。	事前モニタリング結果を報告 【資料-3 P20～25】
6	- アサリは近年資源量が激減している。 - 一方、 が近年資源量が増えてきている。こういった状況の変化があることを情報共有しておく。	参考意見とする	モニタリング結果を報告 【資料-3 P17】

前回検討会意見と対応

3) 新たなモニタリング手法の検討、次年度モニタリング計画（案）

No	ご意見（概要）	対応（事務局回答）	今回資料
7	- 干潟では、従来の横断測線の評価であったものが、今回調査によって、キーとなる自然砂州の移動が面的に定量的に評価することが可能である。 - より一般的に言えば、河口部の長期的な土砂動態（収支）のトレンドをみることが可能である。 - モニタリングの頻度としては、継続的にみる時期とある程度間隔をあけて実施するとき等をうまくわけていけば良い。	現在の試行を踏まえ、モニタリング方法・頻度などを更に検討していく。	今回検討結果を報告 【資料-5 P7～12】
8	- 干潟の面的な状況を把握する手法として、今回のドローン調査方法は非常に有効であり、強力な武器となるだろう。 - 調査結果は時間軸でみていけることが重要であり、是非進めてもらいたいが、一方で面的な評価を行ううえでは、地上でのサンプリングも重要になるので、セットでみていけると良い。		
9	- 干潟の指標種の生息状況をみるうえで、河床高とセットで、さらに非施工区を含めてみていくことは重要である。 - さらには、塩分濃度との関係は、これまでの調査では評価できていない。 - 塩分を観測するのはハードルが高く、連続観測が望ましいが、現実的に対応可能な範囲で実施を検討してもらえると良い。		
10	- ドローンを用いた植生調査により、植生のマイクロハビタットの評価などにもつながっていくことが期待される。 - 引き続き、有効なモニタリング手法を検討していただきたい。		今回検討結果を報告 【資料-5 P13～14】